

SNSアンケートを利用した日本人韓国語学習者の実態調査

稲川 右樹

1. はじめに

「冬のソナタ」に端を発する韓流ブーム以降、日本における韓国語学習者は年々増加の一途を辿っていることは様々な研究で言及されている。朴珍希 (2016) によれば、2013年現在、韓国語を開講している大学数は英語以外の言語としては中国語、フランス語、ドイツ語について4番目に多く、474校となっている。2000年には263校であったことと比較すると実に1.8倍の増加である。中等教育に目を移せば、2016年現在、378校と中国語に次いで2番目に多く、1999年の2.5倍増となっている¹。これらのことから韓国語は現在の日本において「最も勢いのある第2外国語」と言えるが、日本における韓国語学習者の全体像、つまりどんな人たちが、どんな場所で、どんな思いを持って韓国語を学んでいるのかを知ることは容易ではない。日本の韓国語学習者についての既存の研究は、そのほとんどが大学にせよ高校にせよ、「学校」という場所に属している学習者に限られていた。しかし、学校以外にも巷には幾多の民間韓国語教室が溢れ、各自治体の公民館や文化センターなどでも韓国語教室が数多く開設されている。日本に居住する韓国語ネイティブから個人レッスンを受けている学習者も無視できない。そして何より、特定の教室や教師に所属することなく、一人で学習を進めている独学者の割合が非常に多くその正確な数を把握することは困難を極める。

本研究は不特定多数に広く開かれた SNS 空間の特性を最大限に活用したアンケートを取ることにより、より幅広い層の韓国語学習者の実態を調査し、日本における韓国語学習の全体像を描き出そうという試みである。

2. 調査方法

今回の実態調査は Google フォーム上に作成したアンケートを、筆者の Twitter アカウント (@yuki7979seoul) を通じて発信し回答を集めた。その時のツイートを図1に示す。

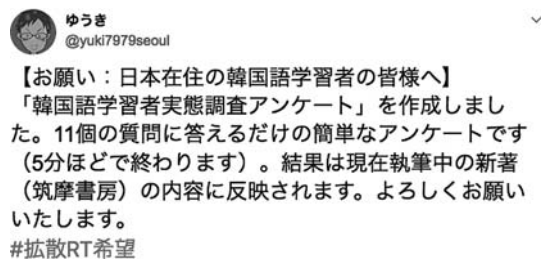


図1 アンケート募集用ツイート

¹ 朴珍希 (2017)

2019年5月2日午前11時42分に発信された図1のツイートには、24時間で317回RTされ、80966のインプレッションがあった。回答者が当初の目標だった2000人に達した2019年5月3日午前3時42分に回答を締め切った。

3. 設問

本アンケートでは日本人韓国語学習者の実態を探るために10項目の設問を設けた。それぞれの設問の内容と回答選択肢は以下のとおりである。

1. 性別（男性、女性）
2. 年齢（10代、20代、30代、40代、50代、60代以上）
3. 職業（中高生、大学生・大学院生、会社員、主婦、公務員、自営業・フリーランサー、その他）
4. お住いの地域（北海道、東北地方、関東地方、中部地方、近畿地方、中国地方、四国地方、九州・沖縄地方）
5. 韓国語を初めて勉強してからの期間（1年未満、1年～3年、3年～5年、5年～10年、10年以上）
6. 自分が現在思う韓国語のレベル（入門、初級、中級、上級）²
7. 現在の学習形態（独学、学校（専攻）、学校（非専攻・選択科目）、民間の韓国語教室、公的（自治体・政府機関など）韓国語教育機関、個人レッスン）
8. 韓国語の勉強を始めたきっかけはなんですか（K-POPや韓流ドラマ、韓国人との出会い、韓国の歴史・文化への関心、自分のルーツ、学校の授業、その他（自由回答））
9. 次のうち最もよく接する韓国語メディアはどれですか（韓国ドラマ、韓国映画、韓国語のニュースや新聞、韓国小説、K-POP関連のSNS、一般人のSNS、その他（自由回答））
10. 次のうち韓国語を生かして最もやってみたいことを2つ選んでください（韓国に旅行に行く、韓国に留学に行く、韓国で生活する、韓国語を生かして働く、韓国人の友人を作る、ドラマやコンサートを聞き取る、好きな韓国の芸能人とコミュニケーションを取る、日本のことを紹介する、その他（自由回答））

² 入門（ハングルがなんとか読める、自己紹介ができる）、初級（自分の好きなことを話したり、相手に簡単な質問をしたり、レストランで注文ができる）、中級（日常的な話題に関して自分の意見や感想を述べることができる）、上級（ニュースや新聞などの話題に関して自分の意見を論理的に述べることができる）と定義し、設問中に明記した。

4. 結果

4.1. 総合結果

4.1.1. 性別

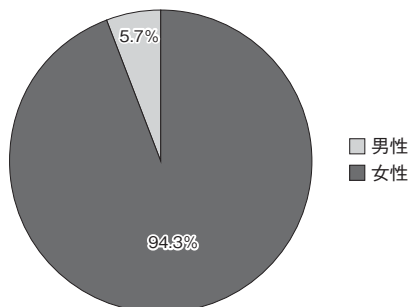


図2 「性別」の結果

回答者 2000 人のうち実に 94.3% が女性学習者であり、男性学習者はわずか 5.7% に過ぎなかった。この一見あまりにも極端に見える性差は、実は韓国語教育関係者が現場で感じる体感とほぼ一致する。日本における韓国語学習者には女性が多いというのはどの教育現場においてもすでに「お馴染みの光景」となっている。日本の某私立大学の学生に対し韓国に対する好感度を調査した金庚芬（2017）の研究においても、対象

となった韓国語専攻学生 45 名の性別内訳は男子 4 名に対し女子 41 名であった。本校³においても 2019 年度入学生のうち、韓国語専攻を希望する学生は 80 名以上いるが、そのうち男性学生はわずか 2 名に過ぎない。数ある外国語の中でも、学習者の性別にこれほど極端な差が現れる言語はおそらく韓国語だけではないかと思われる。日本における韓国語学習者には女性が多いと言われることが多い。がそれがアンケート結果からも改めて明らかになった形である。これほどの男女差が生じる原因は、現在日本における韓国語学習者の中核をなす層がいわゆる「韓流ファン」であり、そのほとんどが女性であることと無関係ではないが、そのことについては項を改めて論ずることとする。

4.1.2. 年齢

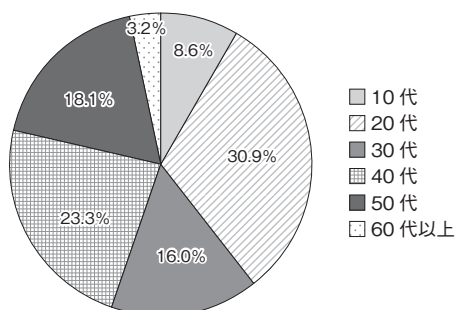


図3 「年齢」の結果

アンケート回答者 2000 名を年齢層別に分類すると、最も多かったのが 20 代（30.9%）、続いて 40 代（23.3%）、50 代（18.1%）、30 代（16.0%）、10 代（8.6%）、そして 60 代以上（3.2%）という結果となった（図 3）。総務省の平成 29 年版『情報通信白書』によると、Twitter は 10 代～20 代の若年層に特ユーザーが多い SNS であるという報告がある。本実態調査も Twitter を利用したアンケート

ということ、当初回答者が若年層に偏ってしまうのではないかということが想定された。しかし蓋を開けてみると、30 代以上の中高年層からも多くの回答を得ることができ、幅広い年齢層において韓国語が学習されている実態が明らかになった。

³ 帝塚山学院大学

4.1.3. 職業

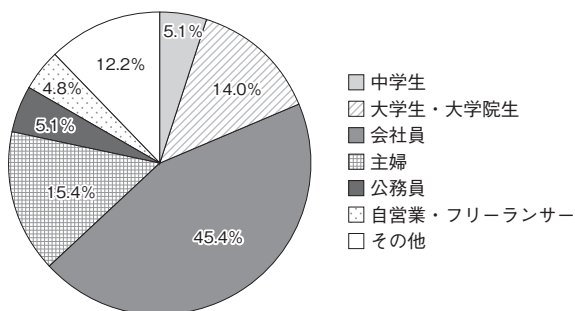


図4 「職業」の結果

学習者の職業としては、会社員（45.5%）が最も多く、主婦（15.4%）、大学生・大学院生（14.0%）、公務員（5.1%）、自営業・フリーランサー（4.8%）、中高生（3.3%）という順序になった。またその他も12.2%いた。

4.1.4. 居住地

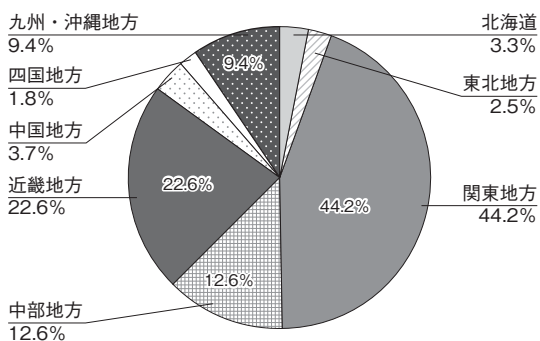


図5 「居住地」の結果

最も多かったのは関東地方で44.1%と回答者のほぼ半数弱がこの地域に住んでいるという結果になった。続いて近畿地方（23.0%）、中部地方（12.5%）、九州・沖縄地方（9.4%）、中国地方（3.7%）、北海道地方（3.3%）、東北地方（2.5%）、四国地方（1.7%）という順になった。これを、実際の日本の地方別人口分布と比較したのが表1である。

表1 韓国語学習者の地方別人口分布（日本全体の地方人口分布との比較）

	韓国語学習者全体に占める割合	日本の人口全体に占める割合
北海道地方	3.3% (6位)	4% (7位)
東北地方	2.5% (7位)	7% (5位)
関東地方	44.1% (1位)	33% (1位)
中部地方	12.5% (3位)	17% (3位)
近畿地方	23% (2位)	18% (2位)
中国地方	3.6% (5位)	6% (6位)
四国地方	1.7% (8位)	3% (8位)
九州・沖縄地方	9.4% (4位)	12% (4位)

順位だけを見ると、4位までは「関東→近畿→中部→九州・沖縄」と一致しているが、関東地方の韓国語学習者の割合は日本の人口に占める関東地方居住者の割合より大幅に多く、韓国語学習者がこの地域に集中していることを窺い知ることができる。また特筆すべきは東北地方の韓国語学習者の比率の低さである。東北地方居住者が日本の人口全体に占める割合は7%と

5位だが、韓国語学習者全体に占める割合を見ると、2.5%で7位となっており、人口で劣る中国地方、北海道地方よりも学習者が少ないという結果になった。また、韓国語学習者人口に占める割合が、日本の人口全体に占める割合を上回ったのは関東地方と近畿地方の2地域だけとなった。韓国語学習者は人口比率に準じて全国に分布しているが、首都圏や京阪神を中心とした大都市圏に居住している割合が比較的多い傾向があることが推察できる。

4.1.5. 韓国語学習歴

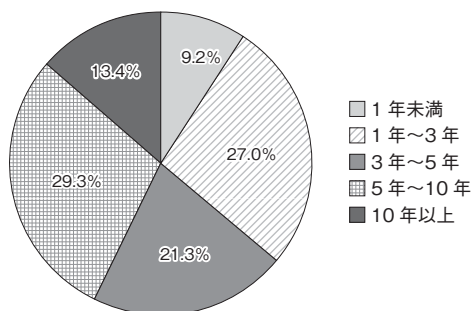


図6 「韓国語学習歴」の結果

韓国語を初めて勉強してからの期間はどれぐらい経つのかについての回答である。

最も多かったのは5～10年で29.3%、そして僅差で1～3年(26.9%)、3～5年(21.3%)と続いた。10年以上という回答も13.3%あった。最も少なかったのは1年未満で9.2%だった。語学学習はともすれば三日坊主になってしまいがちだが、韓国語学習者は平均して5年以上は

続けており、学習モチベーションが長期に渡って維持されているケースが多いことがわかった。その原因としては、他の項でも言及するように韓流コンテンツの影響があるのではないかと思う。つまり、韓流コンテンツを追いかけている間は必然的に韓国語に触れることになり、それが学習モチベーションの維持に直結している可能性が高いと考えられる。

4.1.6. 韓国語レベル

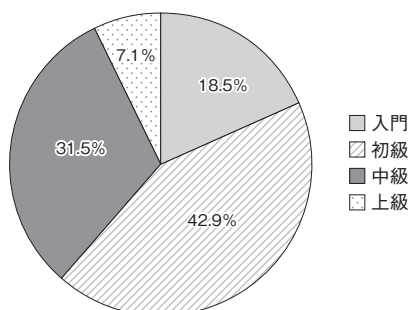


図7 「韓国語レベル」の結果

現在どの程度のことを韓国語のできるのかという自己評価を元に韓国語レベルを判定した結果である。最も多かったのは「自分の好きなことを話したり、相手に簡単な質問をしたり、レストランで注文ができる」という初級レベル(42.9%)で、学習者全体の4割に達した。続いて「日常的な話題に関して自分の意見や感想を述べることができる」という中級レベル(31.5%)、「ハングルがなんとか読める、自己紹介ができる」という入門レベル(18.5%)、「ニュースや新聞などの話題に対して自分の意見を論理的に述べることができる」という結果となった。この結果から、平均的に初中級レベルの学習者が韓国語学習者全体の核をなしていると言える。

日本で出版される韓国語関連のテキストは入門書が質・量ともに最も充実しており、レベル

が高いものになるにつれて選択肢が狭まっていくピラミッド構造をしている。特に中級以上の独学者にとっては自分に合ったテキストを探すのが非常に難しいのが現状である。しかし、中上級レベルの学習者が学習者全体の4割弱を占めることを鑑みると、この層をターゲットとした良質の教材開発は十分に大きなマーケットと言えるのではないだろうか。

4.1.7. 学習形態

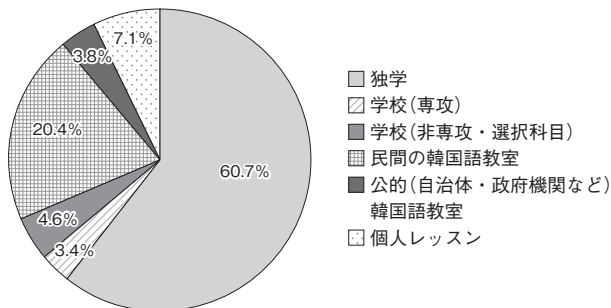


図8 「学習形態」の結果

学習形態の結果を見てまず気付かされるのは、60.7%という独学者の占める割合の多さである。実に学習者全体の10人中6人が学校に通ったり、特定の教師に習うことなく一人で韓国語を学んでいる実態が浮かび上がってくる。その次に多いのは民間の韓国語教室(20.4%)、そして

個人レッスン(7.1%)、次に学校で非専攻・選択科目として学ぶ場合(4.5%)、自治体の文化センターや民団などの公的韓国語教室(3.8%)、そして学校での専攻(3.4%)であった。この結果が日本における韓国語学習者に対する研究全体に示唆するところは決して少なくない。前述した通り、日本人韓国語学習者に対する既存の先行研究はほとんどが大学や高校などで学んでいる学習者を対象としたものであった。しかし、今回の実態調査ではそれらは合わせても全体の1割にも満たない。これは韓国語学習者全体からすると圧倒的マイノリティである。むしろ、今まで研究対象となつてこなかった独学者や民間の韓国語教室、また個人レッスンを拠り所とする学習者の方がマジョリティーなのである。特に過半数を占める独学者に対する詳細なリサーチなくして、日本の韓国語学習者の全体像は掴めないと言っても過言ではないだろう。

4.1.8. 韓国語を始めたきっかけ

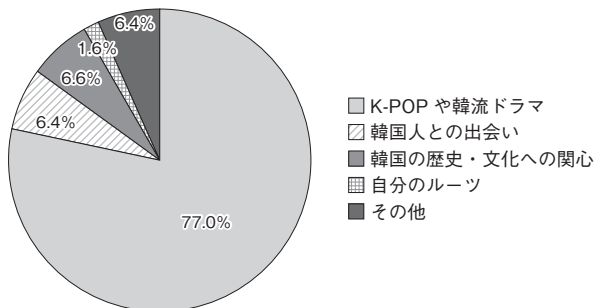


図9 「韓国語を始めたきっかけ」の結果

日本人学習者が韓国語を学ぶようになったきっかけとしては「K-POPや韓流ドラマ」が77%と圧倒的な比率を占める。実に4人中3人である。日本における韓国語学習者の増加は韓流ブームが牽引してきたということは論文や各種メディアでも繰り返し言及されていることである

が、その影響力のすごさを改めて感じさせる結果となった。2位の「韓国人との出会い」(8.4%)に9倍以上の差をつけている。その後、「韓国の歴史・文化への関心」(6.6%)、「自分のルーツ」(1.6%)が続く。「その他」(6.4%)には「韓国サッカーが好きだから」「韓国に駐在することになったため」「北朝鮮に興味があるから」「大学の選択科目だったから」など様々なものがある。

4.1.9. よく接する韓国メディア

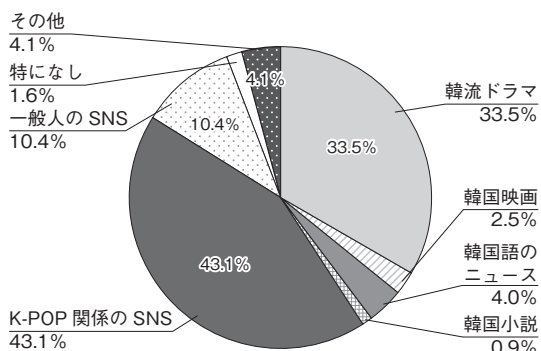


図 10 「よく接する韓国メディア」の結果

日本における韓流ブームは2003年の「冬のソナタ」が先駆けとなって起こったと言われているとおり、日本では長らく「韓流＝ドラマ」というイメージが定着してきた。そのためよく接する韓国メディアに対する回答も「韓国ドラマ」が最も多くなるのではないかと予想したが、最も多かったのは「K-POP 関連の SNS」(43.1%)となり、第3次韓流ブームの勢いを実感させる結果となった。

その次に「韓国ドラマ」(33.5%)、「一般人の SNS」(10.4%)、「韓国語のニュース」(4.0%)、「韓国映画」(2.5%)、「特になし」(1.6%)、「韓国小説」(0.9%)となった。その他(4.1%)には、「韓国バラエティ」「韓国のラジオ」「韓国野球」など様々な回答があり、学習者が想像以上に幅広い韓国メディアに接していることがわかった。

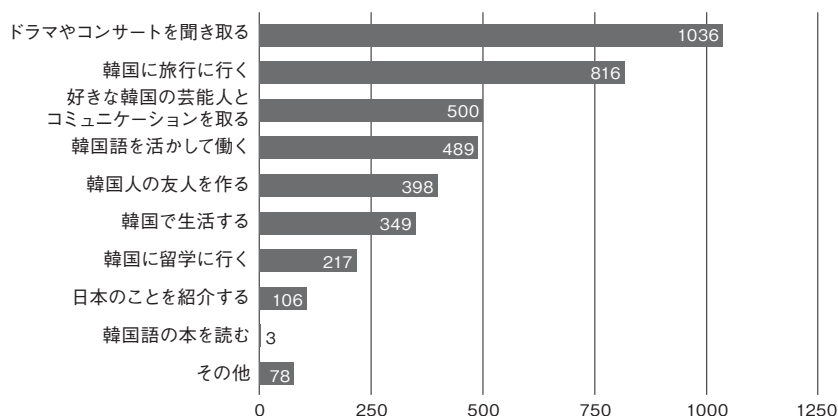


図 11 「学習目標」の結果

4.1.10. 学習目標

語学力向上のためにはその言語を使ってどんなことをしたいのかという具体的な目標を立

て、学習モチベーションを維持することが重要だが、日本の韓国語学習者たちはどのようなことを目標にしているのだろうか。

今回のアンケート結果では「ドラマやコンサートを聞き取る」という回答が最も多く、続いて「韓国に旅行に行く」「好きな韓国の芸能人とコミュニケーションを取る」「韓国語を生かして働く」「韓国人の友人を作る」「韓国に留学に行く」「日本のことを紹介する」という順序だった。ここでもやはり韓流が学習者にとっての大きなモチベーションとなっている様相が明らかになった。また、作文力や読解力よりは会話力や聴解力を伸ばしたい必要があることが伺い知れる結果となった。

4.2. 複合的分析

ここからは学習者の属性ごとにどのような差があるのかを縦断的に観察することで、日本における韓国語学習者像の現在地をより立体的に描き出そうと思う。本論文ではさまざまな属性のうち、興味深い相違点が観察された「性別」と「年齢」による違いを紹介する。

4.2.1. 性別による違い

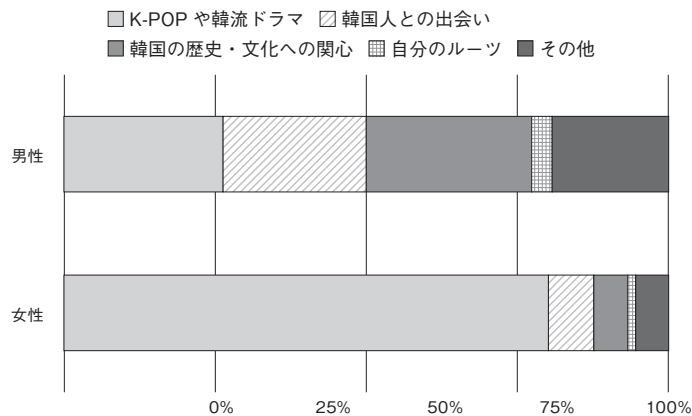


図 12 「韓国語を始めたきっかけ」の性別による違い

韓国語学習者の圧倒的多数を女性が占めていることはすでに前述した通りだが、男女間の回答を比較すると様々な興味深い相違点を観察することができた。

まず、非常に顕著な差を見せたのが「韓国語を始めたきっかけ」である。総合結果では「K-POP や韓流ドラマ」が77.0%と最も多かったが、女性に限って見るとその割合は80.1%に上がった。しかし男性の場合は26.3%に過ぎず、「韓国の歴史・文化への関心」(27.2%)が最も多かった。さらに僅差で3位に「韓国人との出会い」(23.7%)が続いた。女性回答者の場合、これらはいずれも10%に満たないことと比べると非常に対症的な結果であると言える。

筆者は1999年に韓国語学習を始め、2001年に語学留学のために韓国に渡った。いわゆる「韓流前夜」であり、韓流ドラマもK-POPもほとんど日本人には知られていない時代だった。その当時韓国で出会う日本人（と日本語を母語とする在日韓国人）に韓国語を学ぶきっかけを訪ねると、大部分が「韓国の歴史・文化への関心」「韓国人との出会い」そして在日韓国人の場合は「自分のルーツ」と答えたものである。つまり、図12における男性の結果は、20年前の様相と基本的には大差ないと言えるだろう。これは言い換えれば、韓流というコンテンツが（女性に対する絶大な影響力とは対照的に）男性にとってはさほど影響を与えてこなかったということだと言えるのではないだろうか。また、本アンケートの回答者2000人のうち94.3%を占める女性のうち80.1%、つまり1510人は20年前には存在すらしなかった層であることを考えると、韓流というコンテンツの持つ恐ろしいほどの影響力を改めて感じずにはいられない。

4.2.2. 年齢による違い

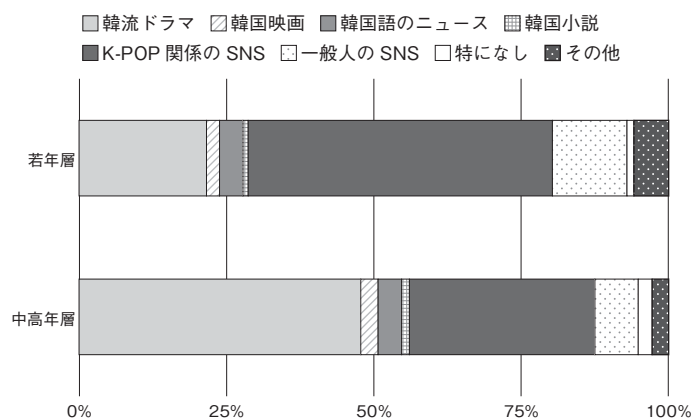


図13 「よく接する韓国メディア」の年齢による違い

現在の日本において韓国語が幅広い年齢層に学ばれていることは3.2.1.でも前述した通りであるが、10代～30代までの若年層と中高年層40代以上の結果を比較すると興味深い違いが浮かび上がってきた。その一例として本稿では「よく接する韓国メディア」に対する結果の違いを紹介する。よく接する韓国メディアとして「K-POP 関連の SNS」を選んだ回答者は若年層においては51.9%と過半数に上ったのに対し、中高年層では31.4%で2位だった。一方「韓国ドラマ」を選んだ回答者数は中高年層において47.9%だったのに対し、若年層では21.9%であり、割合としては中高年層の半分以下だった。「韓流」が年齢を問わず韓国語学習者間の大きなモチベーションとなっているのは事実だが、その「韓流」の内訳には年齢層によってかなり顕著な差があることがわかった。つまり若年層にとってはK-POPが、中高年層にとっ

では韓流ドラマが最も身近な韓流コンテンツであるということである。これは日本人による韓流コンテンツ受容様相とほぼ一致する。日本における韓流は一般的に第1次韓流ブーム（2005年頃～2010年頃）、第2次韓流ブーム（2010年頃～2012年頃）、第3次韓流ブーム（2017年頃～）に分けられるが、第1次韓流ブームの軸が「冬のソナタ」に代表される韓国ドラマであり、主に中年女性を中心に支持されていたのに対し、2019年現在起きているとされる第3次韓流ブームの軸はK-POPであり、その主な担い手は10代～20代の若年層であるとされる⁴。今回のアンケートはその傾向を改めて示すものとなったといえるだろう。

5. おわりに

以上、SNSアンケートを利用した日本人韓国語学習者の実態調査についての結果を述べた。今回の調査を通じて次のようなことが明らかになった。

1. 韓国語学習者は圧倒的に女性が多い。
2. 学習者の居住地は全国の人口分布とほぼ一致しているが、首都圏や京阪神などの大都市圏にやや偏っている。
3. 独学者の割合が半数を超えている。
4. ほとんどが韓流をきっかけに学習を始めており、学習目標も韓流に関係するものが多いなど、韓流そのものが学習者にとって最大のモチベーションとなっている。
5. 若年層はK-POP、中高年は韓流ドラマを通じて韓国語に接している。
6. ただし男性学習者にとっては韓流の影響はさほど大きくない。

もちろん今回の調査はTwitterを通じて行われたため、普段からSNSに接していない学習者層の実態を十分に汲み取れていないという問題点はある。また、属性ごとのサンプル数にかなり偏りが出た（女性に比べて男性が圧倒的に少ない、四国地方や中国地方など地方の学習者のサンプル数が少ない）ことは否めない。にもかかわらず、広範囲に開かれているというSNS空間の特性を利用することで、現在の日本における韓国語学習者の全体像を描き出すことは出来たのではないかと思う。

参考文献

- 金庚芬「日本の大学生の韓国、韓国人、韓国語に対する好感度－韓国語学習者・非学習者別に－」、明星大学紀要 第53号、2017年3月。
総務省『平成29年版 情報通信白書』、2018年7月。
日経クロストrend「第3次韓流ブーム 若い女性がK-cultureにハマるワケ」2018年5月2日
<https://xtrend.nikkei.com/atcl/trn/pickup/15/1003590/042401672/>

⁴ フリー百科辞典 Wikipedia「韓流」参照

朴珍希「日本における韓国語教育に関する研究：大学の韓国語学習者調査にみる現状と課題」、岡山県立大学教育研究紀要 第1巻1号、2016年3月。

朴珍希「外国語としての韓国語教育の現状と課題－岡山県内の大学・高校の「第2次韓流ブーム」以降の変化を中心に－」岡山県立大学教育研究紀要 第2巻1号、2017年3月